

郷土高槻叢書 第八集

藤澤長治著

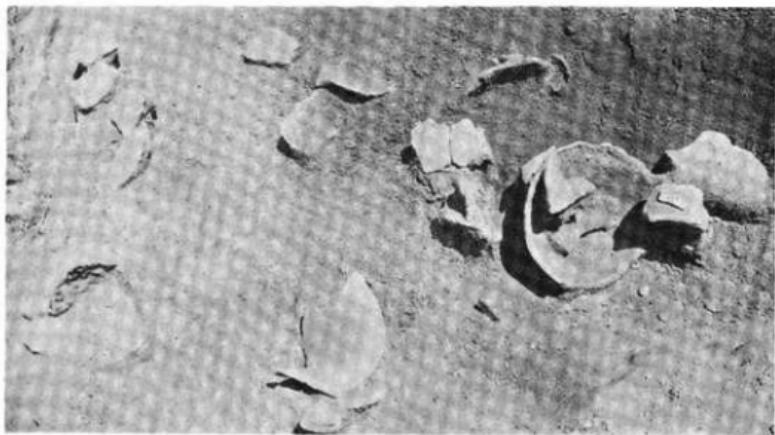
高槻市
天神山
彌生式時代遺跡発掘報告

高槻市教育委員会



B5区土器大型片密集部

(春日丘高校 小西君撮影)



B9~10区土器大型片密集部

(春日丘高校 小西君撮影)

目

次

插 図 目 次

一、まえがき	一
二、発掘の実施と遺跡の状態	三
三、遺物	三
四、あとがき	三
一圖 遺跡附近地形図（地理調査所約六千分の一地形図「高根」）	二
二圖 区割説明図	六
三圖 発掘地区実測図	一
四圖 石跡等実測図	五
五圖 石斧実測図	一
六圖 土器実測図	六
七圖 土器実測図	一
八圖 須恵器実測図	一
(II) (I)	一一〇

一、まえがき

この高槻市においては、彌生式時代の遺跡として、京都大学農学部附属農場の安瀬の遺跡が古くから知られており、学界に有名である①。この遺跡からは、彌生式時代の初めから終りまでの遺物が出土して、こゝに彌生式時代の全期間にわたって、引きつづき人々が生活していたことをはつきりと物語っている。しかし残念なことは、この遺跡では住居址などの様相については、全くわかつていないのである。

ところが、今一つの彌生式時代の存在が前の戦争中に明らかになつてきただ。これが今回発掘を実施した天神山遺跡である。即ち、戦争中にこの地で陸軍の工兵隊が作業を行い、遺物の出土を見たのであつて、それを現在の國立奈良古文化財研究所員である坪井清足氏がはじめて注意されたのであつた。この坪井氏によると、ごく小規模な発掘は戦後になつて行われ、又、その後も引きつづき注意を払われて来ていて、この遺跡は安瀬遺跡とはちがつて、大体、彌生式時代の中でも中頃のみに限られるものであることを認められるに至つていた。しかし、何分にも小規模の発掘であつて、その成果も一般に公表されるまでには至っていない。その他に、古代学研究会員の免山鶴氏は、この遺跡に久しく注意を払い

つけられ、主として出土の石器についての研究を発表されるところがあつた②。

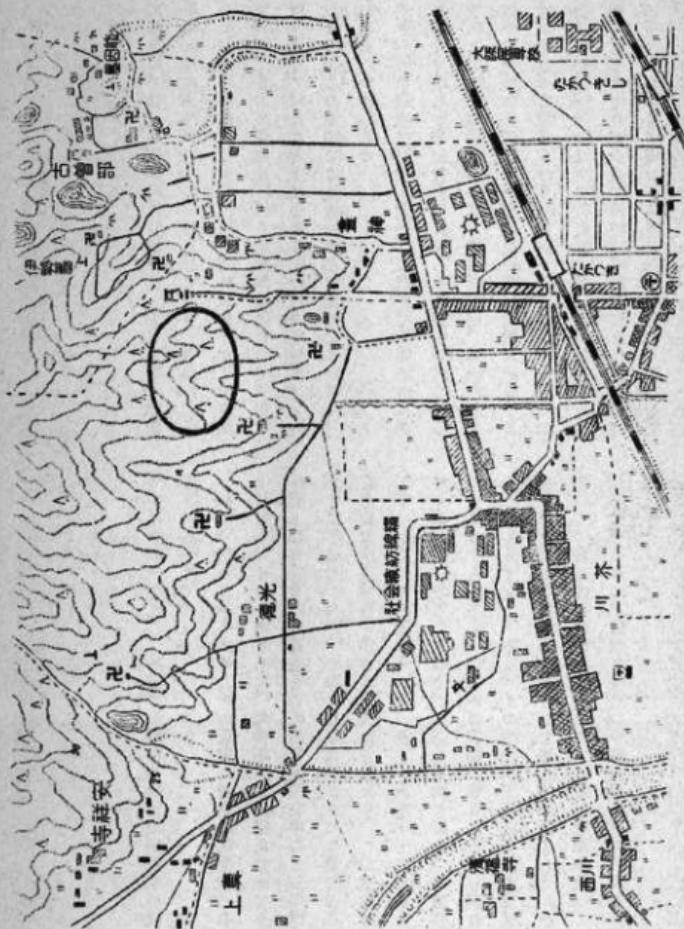
私は、昭和三十年四月より大阪府の府立高等学校に奉職することになり、それを機として、考古学の現成階においてその必要を痛感されている地域調査をこの三島地区を中心として行うことをして志すようになつたが、かねてから面識のあつた春日丘高校出身、

立命館大学史学科在学中の池田寿夫君より、この遺跡が近年土木工事のために相当破壊されて、多くの遺物を出したことを聞き及び、四月二十三日にはじめて間君の案内により、本遺跡を訪れたのである。ところが、数年来の道路工事による切り割りの断面をくわしく見て行くうちに、この遺跡が予想以上に大規模なものである、また色々に遺物を包含した黒土層が地山の中に落ちくぼん

でいて、堅穴式住居址が切断されている可能性が濃いことに気がついた。こゝに、破壊に先立つ学術調査実施の必要を痛感したのである。

そこで、各方面に連絡をつけて行ったところ、地元の島上高等

第一圖 遺跡附近地形図



部員として在学し、歴史研究部はこの遺跡の調査を試みようとして、西間の根津知男先生を中心として努力しておられたことを知った。また、高槻市立第一中学校の校長であつて、高槻市の市史

主体とし、高槻市の援助を受けて、天神山遺跡の発掘が実施されることになつたのである。

調査委員をしておられる天野高信先生を会長とする三島郷土史研究会があり、じの地の学校の先生方や生徒諸君、地方史家の方々などによつて、郷土史研究の態勢ができ上つていて、種々の活動が活潑に行われていることを知つたのである。

このように条件と機運が相当に熟していたところであつたので、五月十一日に島上高等学校においてオ一回の追略会が持たれて以降、急速に事は運ばれ、八月初旬を期して、三島郷土史研究会を

二、発掘の実施と遺跡の状態

これより、今回の発掘について具体的に述べる。ここに于けるが、特に労組実習の毎日のが流について、やゝ深ままでに詳しく述べて行くのは、学問的な発掘が一体どのように面倒で、慎重さを要するものであるかを知つていただきたいからである。

発掘実施に当つては、大体次のような基本方針が立てられた。

オ一に、発掘の主体が三島郷土史研究会に置かれたことからも明かなように、一部の学者を本位とする発掘ではなく、地元の人

① 島田貞彦・水野精一・小川五郎・三宅宗悦「櫛津田高槻

櫛津発掘石器時代遺跡調査報告」（『人類学雑誌』オ四四巻六七号）、小林行雄「安瀬郷土研究」（『考古学』オ三巻オ四号）参照。

② 免山周「高槻市天神山彌生式遺跡」（『古代学』六号）参照。

マジロハシハヤヒ、第三の歴史を明かにする方針をつらぬくこと

である。具体的に言えば、実際の仕事を進めて行くのは、島上。

茨木・春日丘・吹田の四高等学校と浪速工業高等学校の歴史研究部の生徒諸君及び同じく地元の中学校の生徒諸君であつて、生徒諸君の自主的な勉学に役立つように計画し、又、特に夏休み中の炎暑の下で行うので、無理な計画は絶対に避けるよう留意し、しかも一方において、学問的な、また発掘技術上の指導を強化し

て、学問的な水準を高く保つための最大の努力を行なうこととした。かになつて来たにすぎず、特に近畿地方においては、低地の聚落^{オニ}には、学問的な面に關しては、まず本遺跡の年代を確実につかむことである。本遺跡の年代についてはすでに述べたように、大体彌生式時代の中頃に限られると推定されているのであるが、これを更に確実な証拠の上に立つて検討することである。高槻市は一方で、彌生式時代の全時期に通する安満の遺跡が存在するので、それとの関連をどのように考へるかと言う上からでもこのことは必要であり、また、全般的に言つても、彌生式時代の中頃には、山手に新しい大聚落が形成される傾向が注意されているので、この遺跡も又、その例に加わるかどうかを確める必要があつた。その上に、戰後、高槻市内より銅鏡の出土が伝えられ、その行方が一時不明となつてゐたが、最近東京大学の教養学部に購入されたものがその銅鏡であることが推定され^①、しかも、これが本遺跡に關連するものと思われる所以、銅鏡の埋められた年代を考える上でも、この遺跡の最終年代を確認する必要があつたのである。

次三には、これも学問的な問題であるが、遺物の蒐集を目的とする発掘ではなく、当時の人々の生活、特に当時の社会組織まで、も考える資料を得ることを目的として、住居址の実態を明らかにすることを目指すのである。勿論これは非常にむずかしい問題であり、彌生式時代の聚落に関する研究は甚だおくれていて、戰後、有名な静岡県の登呂遺跡などの調査を機として、徐々に明らかとなり、一応登呂遺跡などから左曲して貯水槽の東側に至

る。かになつて来たにすぎず、特に近畿地方においては、低地の聚落の住居址についてはわずかに知られていても、山手に立地する彌生式時代の聚落の住居址については殆ど知られていないと言つてよく、また、今までの少數の経験を聞いて見ても、その調査が非常に困難なものではあることはほど推定できたのであるけれども、このようないくつかの調査に対する少しの手がかりでも、また、経験でも得られればと考えて、あえてこのような目的を立てた。それは、埠常に困難なものではあることはほど推定できたのであるけれども、この調査に対する少しの手がかりでも、また、経験でも得られればと考えて、あえてこのような目的を立てた。それは、埠常に困難なものではあることはほど推定できたのであるから、このためにはたとえ困難であろうとも、住居址の調査をこれからは重要視して行かなければならぬからである。今回の発掘調査にあたつては、後述するように遺物が少いのは、このような目的でなく、社会組織の変化を知らなければならないのであるから、そのためにはたとえ困難であろうとも、住居址の調査をこれからは重要視して行かなければならぬからである。今回の発掘調査にあたつては、後述するように遺物が少いのは、このような目的が主となつた必然的な結果である。しかも、ここで意図した住居址の解説も甚だ不充分であつたが、少くとも、このような調査を行なう場合には、どこに困難があり、今後どのような点に注意すべきかといふ見通しだけは得ることができたのである。

大体、以上のような方針によつて発掘を開始したわけであるが、具体的な発掘の記述に入るに先立つて、順序として遺跡全体の状態から述べて行くことにする。（オーラル参考）

り、再び左曲して下り坂となり、市営の火葬場の西側を通り、靈福寺の裏手に出で、寺の東側を走って、再び市街地の方へと帰っている。結局、この新道は逆のひ字形を描き、その中に南へ延びる一つの小さな尾根とその両側の二つの谷とを包み込んでいるのであるが、この道による切り通しの断面には至るところに遺物包含層が露出していて、附近一帯——その正確な境界は未だ明確にして難いが——恐らく東西・南北とも二百米を越える地域が露出式時代の遺跡であることを示している。先に述べたように、住居址の調査を第一の目標とする以上は、この切り通しの面にあらわれた遺物包含層と地山との関係に注目して、これを手がかりとして適切な発掘地点を選ばなければならない。神社の左手から道を登つて行くと、社殿の西方に当るあたりの切り通しの面に、先ず

数ヶの遺物包含層が地山へ落ち込んでいるのが認められるが、この場所は西方に向する急な傾斜面であるために、発掘するとなると耕土の便が至つて悪く、また、急傾斜面であることから考えて、

住居址としては有望でないと判断し、手をつけないこととした。

次に、貯水槽の東方に当るやう広い平坦部が道路によつて切断されていて、最も確実らしい堅穴式住居址の断面と推定されるものが、道路の北側の切り通しに一ヶ所露出しているが、上面が畠になつていて作物が作られているために、残念ながらこの地点も断念することにした。さて、火葬場の西側には、火葬場の敷地と道

路とによつて切り取られて残った雜木材の一区割があり、その切り通しの断面にもやはり明確な遺物包含層の落ち込みが認められる。人頭と日數とを考え合せた上で、こゝなら一応完結した発掘を実施することができる見通しがあり、また、住居址出現の可能性も淡く、更には、幸い土地所有者たる高槻市の了解を得ることができたので、この地点に集中的に力を注ぐことに定め、もし餘裕があり、事情が許すならば、他の地点、特に貯水槽の東方の地点に及びたいと考えた。しかし、結局のところは、この地区的約半分を完全に調査したのみであり、他地点には全く手をつけずに至らなかつた。これは、前述したように、高校生が主体となつた発掘であつて、体力、日時の面でつとめて無理をさけたこと、もその理由の一つである。

以下は、日記風に作業の進捗状況と、それによつて明らかになつた遺跡の状態について述べて行こう。

八月一日(月)

午前九時、発掘本部の靈松寺に集合。

すでに準備会で打ち合せてあつたように、庶務会計を島上高等学校の根津知男先生、生徒の總指揮を茨木高等学校の東晶先生、各校の生徒の指導を各校の先生方、各校を代表して生徒の委員を一名ずつ、発掘の技術指導面を藤沢及び京都大学文学部考古学教室の大学院学生小野山節氏という構成のもとに、これから十日

間の発擧を開始することとし、種々の打ち合せや準備を行う。以後の十日間は、人目に多少の増減はあつたが、各校の先生方十名餘、生徒約五十名にて、休日なく仕事は遂められた。

発掘開始前の諸準備に約一時間費して後、十時より約一時間にわたり、全員にて追跡全体を見て歩いた。これは追跡の現状を皆がよく把握しておくためである。

十一時より、発掘地点の灌木、草の除去作業にうつり、十二時
に一たん中止、二時より四時三十分まで作業を続行した。本日に
て整備予定地の全面の草刈りを終了し、木の根の除去も約半分を
終つた。

八月二日(火)

本日の午前中は昨日にひきつづいて木の根の除去を行い、一方では多数の杭を用意しておいて、発掘予定地を横積二米間隔の線にて柵盤目に削って、線の交叉点に杭を打ち、今後の発掘を円滑にする準備を行う(オニコムラ法)。ほゞ南北に走っている道路を基準とし、南北二十メートル、東西十六メートルの区画を二メートル平方の正方形に割つたわけで、この区画と道路との間のみは一メートル幅とした。そして、道路(即ち西側)より一メートルの区画をも、それにつづく

第2圖 因對說明圖

A1	B1	C1	D1	E1	F1	G1	H1	I1	J1
A 10	B 10	C 9	D 10	E 10	F 10	G 10	H 10	I 10	J 9
		B9							
	B8								
	B7								
	B6								
	B5								
	B4								
	B3								
	B2								
	B1								
A 1	B 1	C 1	D 1	E 1	F 1	G 1	H 1	I 10	J 1
Aa	Ba	Ca	Da	Ea	Fa	Ga	Ha	Ia	Ja

一米幅ずつとB・C・D・E・F・G・H・J（EとJとはまだらわしくなるためIを除く）と名づけ、南側より一米幅ずつを1・2・3・4・……10と名づけた。従つて、例えばA1・E4・G6等と言う名番号によつて各番盤目を呼ぶことができるようになつたわけである。なお杭の番号もこれに関連させてつけた。第一圖を見ていたゞくわかるが、その区の東北隅に区と曰いた番号の杭が来るわけである。

杭打ちが終ると、各区大体二名の割り当てにてB2～B10・D

2～D10・E2～E7の二四区にわたって一齊に本格的な発掘を開始した。最初の内は表西の磨歯土の除去である。発掘地区全般にわたつて少數ながら圓生式土器の細片が出土するが、それと共に須恵器の破片も出土し、後世の擾乱層であることを示している。

午後も同じ要領で作業を実行する。大体表土（磨歯土）の除去を終つたが、まだ包含層と地山との区別はつきりとつかめない。

土が夏の日照によつてすぐ乾燥してくるので、包含層と地山との土の色の異同の識別が非常に困難になるらしいのである。そこで一般の作業が終つて後、数名が居残つてB4区の西半を掘り進め、地表下約三十厘米までに至つたが、なお土器片を見、また、掘り進むに従つて土の色も黒ずんでいて地山とははつきり区別できそうな覺えしがついて来て、少し安心することができた。

八月三日（水）

昨日のように一区毎二名では作業しにくことがわかつたので、本日からは一区毎四名に編成変えを行うこととし、まずB2～B10・D9・E9の合計十一区に集中して発掘を進めることにする。午前中ではまだ包含層と地山との境界の見当がつかない。午前の作業の終了間ぎわになつて、B9区とB10区の境界にて、土器大型片が密集して存在していることを発見し、これらの土器片はとり上げないまゝで慎重に掘り進めて行くことにする。

午後はまず現在発掘しつゝある各区とも、地表下三〇～三五

厘米まで掘り下げ、そこで一応水平にすることを目的とした。これは各区において適度がまちまちであつて凹凸がつき、全体の見当がつけにくくなつたためと、今まですでに場所によつては地表下

三〇～三五厘米まで掘り下されたところはあるが、その所見によれば、なお圓生式土器片は細片であり、且つ須恵器片の混入も認められるので、この深さまではまだ擾乱層である見通しがついたからである。また、地表下三〇～三五厘米で一応水平にしたのは、B9区とB10区の土器大型片群が表土下三五厘米で現われはじめたの

で、これ以下の深さは更に慎重に掘り進める必要があると考えたので、一応区切りをつけるためにこゝで水平にして整理したわけである。生徒諸君にとつては発掘ははじめての経験であるので、このような方法も慎重を期するためには必要であった。この作業を進めている内に、B6～B8区は地山に迷したと認められたので、これらの地区では掘ることを止め、その人員はD2～D4区に移動した。

同じく午後、B3区の擾乱層中より、石庖丁の破片一個を発見し、B2区の地表下約三五厘米の深さより、裏向きになつた状態で

完形の器蓋一個と、倒壊になつた高杯の脚部一個とを発見した。（遺物の項参照）

本日の所見によれば、地表下大体三〇～三五厘米までは擾乱層で

あつて、土色はやゝ黒ずんでゐるが地山とあまり變らない。しかしそれ以下の深さになると包含層はもはや須恵器の混入はなく、彌生式時代の純粹な層であり、土色もすつと黒ずんでいるようである。なお擾乱層は南に向つてゆるやかながらも深さを増してゐる模様であった。

八月四日（木）

作業区域はB₁～B₅、B₉、B₁₀、D₃～D₆、D₉、D₁₀

の合計十三区。

本日特に注意されたことは、道路による切断面の所見から推定して、B₁、B₂区あたりにて包含層の落ち込みの両端がつかまえられると考へていたにもかゝわらず、なかなかはつきりしないことであつて、ひる区においてもやはり両端はつかまえられない。B₃区より鉄滓と見われるものが出土し、後に数点、やはり鉄滓らしいものが発見され興味を引いたが、結局のところ次第に明らかになつて来たのは、発掘地域の南部、約八米幅ぐらゐは後世の擾乱がはげしく、この鉄滓らしいものは彌生式時代のものとは考へられないことであつた。実、彌生式時代の純粹の遺物は含層と認められるところからは、鉄滓らしいものは発見されなかつた。前に述べた包含層の落ち込みの両端がつかまえにくつたのも、この擾乱の事実によるものと考えられる。

D₆区は全面にわたつて包含層が深いようで、B₆区が早く地

山に達したのは全く異つてゐる。

B₂区、D₄区において地表約四五釐のところより變の口縁部の大形片を発見する。土筒器である。

D₉～D₁₀区の土器片密集部は丁寧に原状のまゝ掘り出し、午後の作業終了時に一応写真を撮しておく。

八月五日（金）

昨日の区割を引きつけて発掘し、新たにD₇、D₈区を加う。

本日に至つて、D₇、D₈区も包含層の深いことが判明し、また、D₉、D₁₀区も全面にわたつて包含層が深く、結局、B区とD区とでは包含層の状態が非常に異つてゐることが明瞭になつた。須恵器の出土状況から考えて、B・D両区とも、昨日考へていたより更に広く、即ち発掘地域のほゞ南半分は相当深くまで後世擾乱を受けていることが明らかになつて來た。

B₉～D₁₀区の土器片密集部を天然色を含む写真撮影を行い、出土状態を実測した後に取り上げる。これらの土器は意識的に置かれたものとは思われず、横倒しになつてゐるものが多く、雜然としている。分明した器形は次の如きものである。

小型 壺（完形品）一
　　（遺物の項参照）
　　（遺物の項参照）

細頸壺の大片
　　（遺物の項参照）
　　（遺物の項参照）

庭 部 片 二 (内一つは大片、遺物の項参照)

発掘区域の北の畠地にて土器の表面採集を行つたが、その内に高杯のほか壳形の分るものが一箇がある。(遺物の項参照)

八月六日(土)

本日の作業区域は、B2～B5、B9、B10、C9、D4～D10、F5、F6、F9の合計十六区。

新たにC9区に手をつけたのは、B9～B10の土器片群がなお続いているかどうかを確かめるためであり、また、B区とD区との包含層の状態が非常に異つてゐることがわかつたので、結局C区全体を掘る必要が明らかになつたので先づこゝから始めたのである。

F区の発掘は包含層の統き工合を確かめることを目的としたのであるが、人員の関係でなかなか進まない。

B4区にて土器片、須恵器のやゝ大きい破片を発見する。

八月七日(日)

本日の作業区域は、B2～B5、B9、B10、C9、C10、D4～D10の合計十四区。

特に着しい新事実はない。

D8区にてはじめて石鏡一個出土。

一枚の作業が終了して後、一部の者が残留して、各区の検討と

Aライン、Cライン(杭の跡)の断面を実測する。

八月八日(月)

本日の作業区域はB1、B2、B4、B5、B9、B10、C4～C10、D5～D9の合計十八区。C区の必要地区全面にわたつて発掘を開始したわけである。

又、E6、F6、G6、にまたがる東西方向の幅一米のトレンチ(試掘溝)を掘り始める。大体、発掘はBCDの三区に限らざるを得ない見通しがついて來たので、包含層が更に東方に向つてどのように続いているかを確かめたかったからである。

C10、D7、D8の三区にて石器各一を発見。

B5区にて、先のB9～B10区のものに類似した土器大片の密集部を発見し慎重に掘り進めて行く。

八月九日(火)

本日の作業区域は、B4、B5、B9、B10、C4～C10、D4～D9の合計十七区と、昨日に引きつづいての6のE～Gのトレンチ。

C区の状態が漸次明瞭になつてくるにつれて、発掘地域の遺跡の状態がようやく把握できるようになつて來た。遺跡の状態については後に一括して述べることにする。

C5区にて石鏡一個を発見。

本日の作業区域は、B1～B5、C4～C9、D4～D9、6

の D 10 の レンチ。

本日の午前中にて、上述の区域はすべて地山に達し、一応の発掘を終了した。

D 10 区にて磨製石斧片を発見（石斧、石斧についてはすべて遺物の項参照）

午後は半数の人員にて後片づけ、残り半数にて遺跡の最終の整理及び実測を行い、終つて全員に発掘現場において最終段階について分った事実の説明を行う。

その後、発掘本部の靈松寺において全員の茶話会を開き、今回の発掘の反省、感想等を話し合う。

夕方、高槻市の関係者の方々をおまねきして、発掘参加の先生方と共に今後の遺跡の保存等についての相談会を開く。

八月一日（木）

一部の者が残留して、遺跡の実測を完了し、最終段階における遺跡の写真撮影を行い、遺物の整理とその後始末、運搬を行う。

最終段階で判明した限りでの遺跡の状態をこゝへ括して説明することにする（方三回参照。図の A 0, G 8 等の番号は杭である。）

結局、塙山に至るまでの完全な発掘を行うことができたのは、B 1 の北部約三分の一、B 2 と B 10, C 5 と C 10, D 4 の北半分である。

先ず注意されるのは、B 5 と B 9, C 5 と C 9 にかけての、上面のほど平坦な高い部分の存在である。もつとも、この上面の直上はすでに擾乱層であるので、果して本来から上面が平坦であったかどうかは不明である。その西方は A 区の幅一メートルの塙境（発掘せず）を越て、道路による切断面となつていて不明であるが、東部の発掘地域を見ると、各辺はほど互に直角をなし、また、各辺

すでに述べたように、発掘地域の南部は、遺物の出土状態から考えて、明らかに深くまで後世の擾乱を受けている。後に発掘に取りかかった C 区、D 区において、C 1 と C 4, D 1 と D 3 を徹底的に発掘しなかつたのは、この事実が次第に明らかになつたからである。この南部で明らかになつたことは、B 1 区の西南部が振り築かれていること、B 4 区の東南隅に僅七五と八〇厘米の円型の振り築みのあること、D 4 と D 5 区にかけての東寄りに僅約一六〇厘米のやはり円型の振り凹みがあることである。

しかし、これらを彌生式時代のものとする積極的な証拠は全く存在しない。

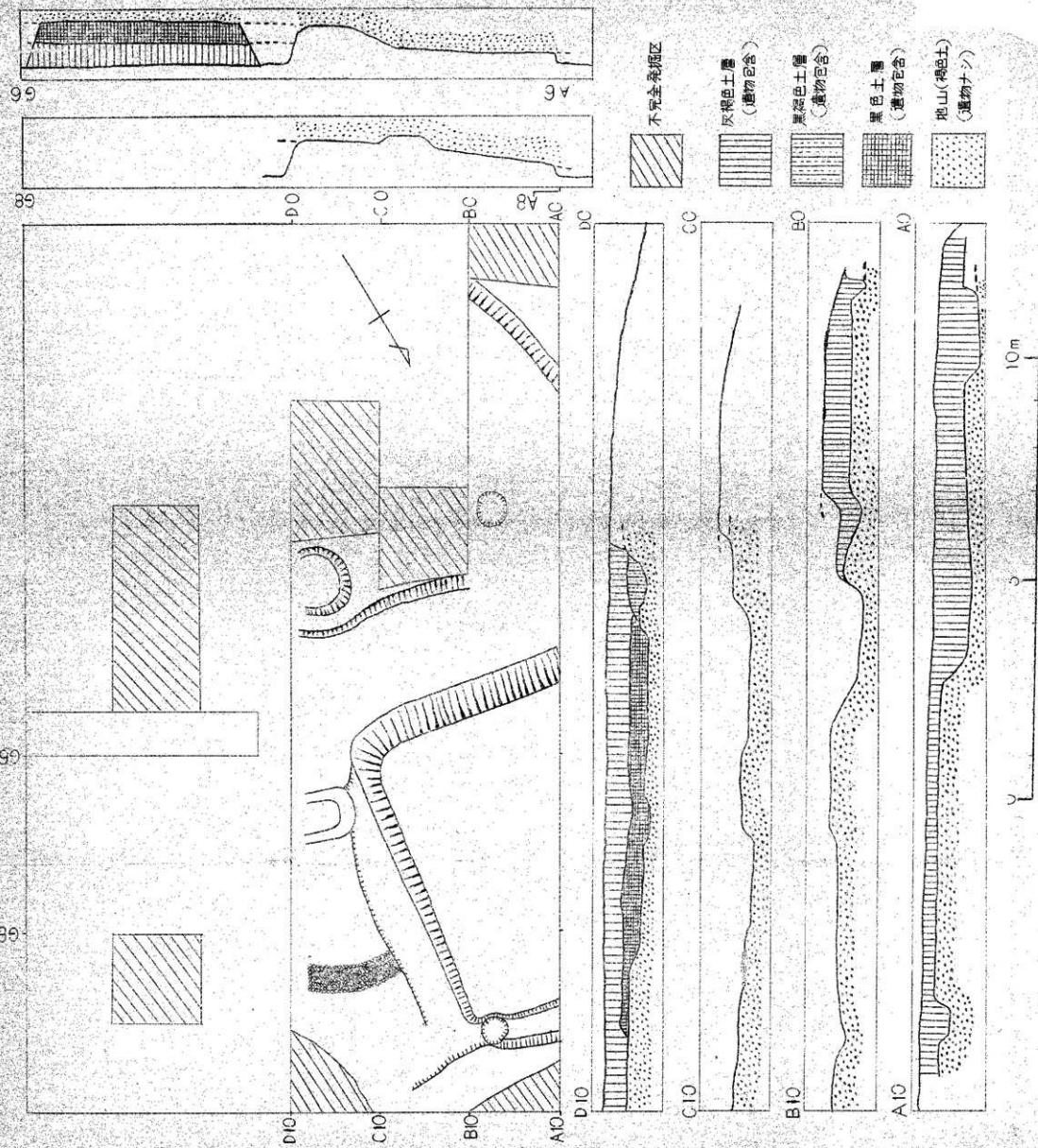
北半部は包含層における遺物の出土状況から考えて、高い平坦地を除いては、彌生式時代の遺構であることは確実である。

最終段階で判明した限りでの遺跡の状態をこゝへ括して説明することにする（方三回参照。図の A 0, G 8 等の番号は杭である。）

結局、塙山に至るまでの完全な発掘を行うことができたのは、B 1 の北部約三分の一、B 2 と B 10, C 5 と C 10, D 4 の北半分である。

D 5 と D 10, その 5 メートルの長さ五メートル、幅約一メートルのトレンチである。

十三図 発掘地区実測図 (8月10日 調査小委員会発掘地西谷上野測 韶次製図)



ははゞ東西、南北の方向に合致している。東辺の長さは約六米五〇厘米である。南辺に嗣つて底部の幅約二米の滑らしいものがある。これが滑状をなすかどうかについては、何分にも発掘地域が限られてゐるので、確実にはわからない。この滑らしい部分の西半に、土器大型片が密集していいたわけである。北辺に嗣つて、底部の幅約五〇厘米の滑らしいものがある。これもまた、地殻が限られていてために、はつきり滑状をなすとは断定できない。こゝからも、前述したように、土器の大型片が密集して発見されている。なおこの滑らしいものには、高い平坦部の東北角に近い場所に、径約七〇厘米の円型の掘り込みが存在している。東辺の外側には一段と低い部分が続くが、この低い部分は、そのE-L-Gのトレンチの状況から考えて、更に東の未発掘地域に及ぶ可能性がある。この部分においては、高い平坦部の東辺に接して、幅約九〇厘米のわずかながらも一段と低い帶があることに注意すべきである。この帶は南端に近づくと共に狭まって消えてしまっている。この帶の東の平坦部には、北寄りの一部分に幅約五〇厘米の東西に走る礫の露呈が認められ、高い平坦部の東南隅に近接して、南北の底幅約七〇厘米の、恐らく隅丸の矩形をなすと考えられる掘り込みの存在が注意される。たゞし、礫帶については、この遺跡地の地層は、断面がレンズ状をなす自然の礫帶を往々含んでいるので、これが自然的なものか、人為によるものかは確定できなければ

この礫帶より上は遺物包含層であり、下は地山であることから考へて、人為によるものである可能性が強いと思われる。そのE-L-Gのトレンチは、主要発掘地域の最低部にはゞ等しい深さまで包含層であり、底は東に行くに従つてやゝ低まつて行く傾向を示すようである。

柱穴の存在には注意して発掘をつゞけたのであるが、確実に柱穴と考えられるものは殆ど検出できなかつた。たゞB-L区の西北隅より東八〇厘米、西五〇厘米の坑に平行するラインの交点で発見された径約十五厘米、深さ十八厘米のやう北東に傾斜する穴が、柱穴である唯一のものと言つて差しつかえない。しかし前に述べたように、地山と包含層との区別がわからにくく、特に土が乾燥すると一そうばかりにくくなるために、或は柱穴が存在していても検出することができなかつたのかも知れないという不安も残つてゐる。他にも穴はあつたが、恐らく立木の根の腐つた後に残つた穴と考える方が適当なものであつた。

発掘の終了段階における遺跡の状況は以上のごときものであるが、発掘区域が時間や労力その他の関係上、狭く限らざるを得なかつたためと、特に畿内における山手に立地する彌生式時代の住居址の参考例が殆ど無い現状から、これが如何なる性格の遺跡であるかを結論することはできない。

この発掘の実態をこゝに報告して、しばらく、将来の知見の拡大を得つて方法がないのは残念であるが、今の段階では致し

方がないであろう。

たゞ、これを住居址の一部と考える場合には、平坦な高い部分を主体として考えるか、その東側にある低平な部分（これが更に発掘地域の東側に接つてゐることは、トレンチの所見から大体推定できる）を主体として考えるかの二つの解釈が可能性として存在することを附記しておこう。前者のように考えるとすれば、高い平坦部上に建築物が存在し、その周囲に溝が掘られていたと推定できるのであり、後者のように考える場合、低平な部分を要穴住居址の床面と推定しうる可能性があるのであって、この場合には高い平坦部との間に、わずかではあるが更に低い帯の存在が意味を持つてくるであろう。勿論、彌生式時代の住居址においては、北九州地方で検出されているような溝の存在も考えに入れる必要があるのであって、にわかにこの部分を住居そのものが存在した部分と断定することもできないが、いずれにしても、包含層と地山との関係が、このように自然的でない凹凸を示してゐる以上、そこに何か特定の意味を考えうることだけは確実である。

三、 遺 物

八月十八日（木）

午後、島上高校生を中心として、今回の発掘参加者の内多集で発掘（少くとも今回も発掘地域の東側は、都合のつき次第、オ一二回の発掘を行いたい希望がある）にそなえて、試験的に表面に石灰を厚く撒いた上で覆土し、必要な時すぐ検出できるように考慮した。これは、石灰がどの程度にこうした目的に役立つかを試験する含みも持つてゐる。

これによつて、今回の発掘作業は、一応のところ終了することになつた。

⑤ 1 園寿彦「大阪府高槻市出土の銅鐸（東大教養学部『古代研究』）」、昭和二八年十二月、共立出版）参照

出土した遺物はすべて島上高校に運び、保管をお願いすることになったが、参加五高校の秋の文化祭に、発掘の結果を発表することとし、陳列方法、全体的な説明方法等については各校で独自性を生かして行うが、最低限度の整理その他については、全員が共同して行う方針がたてられていた。

九月三日に各校の代表者が島上高校において会合を開き、これから整理方法について打ち合せを行う。その結果、十月八日よりはじまる春日丘高校の文化祭まで、土曜日は全員、各校の事情に応じて週の内更に各一日、島上高校において整理を行つてゆくこととした。具体的な整理の内容は、土器の整理と復原、説明図の作製、写真及びスライドの整理編集である。一箇月間にて大体の整理は終了し、各校の文化祭に展示して後、再び遺物の保管は一括して島上高校にお願いし、その後は、私が職を見出しては、

できる限りの整理や実測等を続けて来た。この作業はまだ充分とは言えないけれども、これから述べることはこれらの整理の一端の結果である。

石器

石器は少く、石斧五、石庖丁一、石斧一である。

石斧はすべて原料はサヌカイトであつて打製である。内二本は三角形で柄はなく、他の三本は柄を有する。大きさ等については次表を見ていたゞきたい。

石器番号	長さ	幅	厚さ	備考
1	二四	一八	三・五	八月八日、D8区発見
2	二一	二六	二・〇	八月八日、C10区発見
3	二八	二二	六・〇	八月九日、C5区発見
4	二一	三〇	六・〇	八月八日、D7区発見
5	二二	二一	六・〇	八月七日、D8区発見

(単位：cm)

（鑿はすべてオサ四回参照）

鑿1。無柄。小さいが相当精巧な作りである。先端は欠失。

鑿2。無柄。粗製で左右や不均等ではあるが、刃部は打ち欠きが細かく、のこぎり状をなしている。先端欠失。

鑿3。有柄。荒い作りではあるが形は整っている。柄の端は欠失。

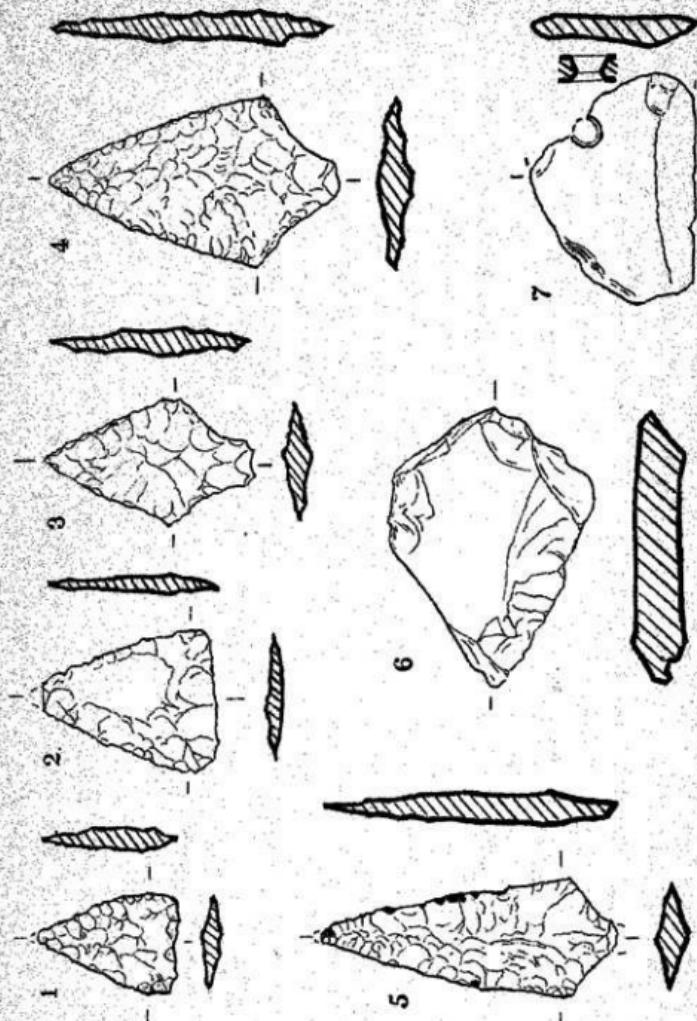
鍔4。有柄。入念で精巧な作りであつて、特に刃部の細かい打ち欠きは美しい。柄の端は欠失。

鍔5。有柄。細長いや特異な形をしている。相当に入念な作りである。先端と柄の端は欠失。因に黒く塗りつぶした部分は発掘の際の欠失部である。断面は菱形に近い。

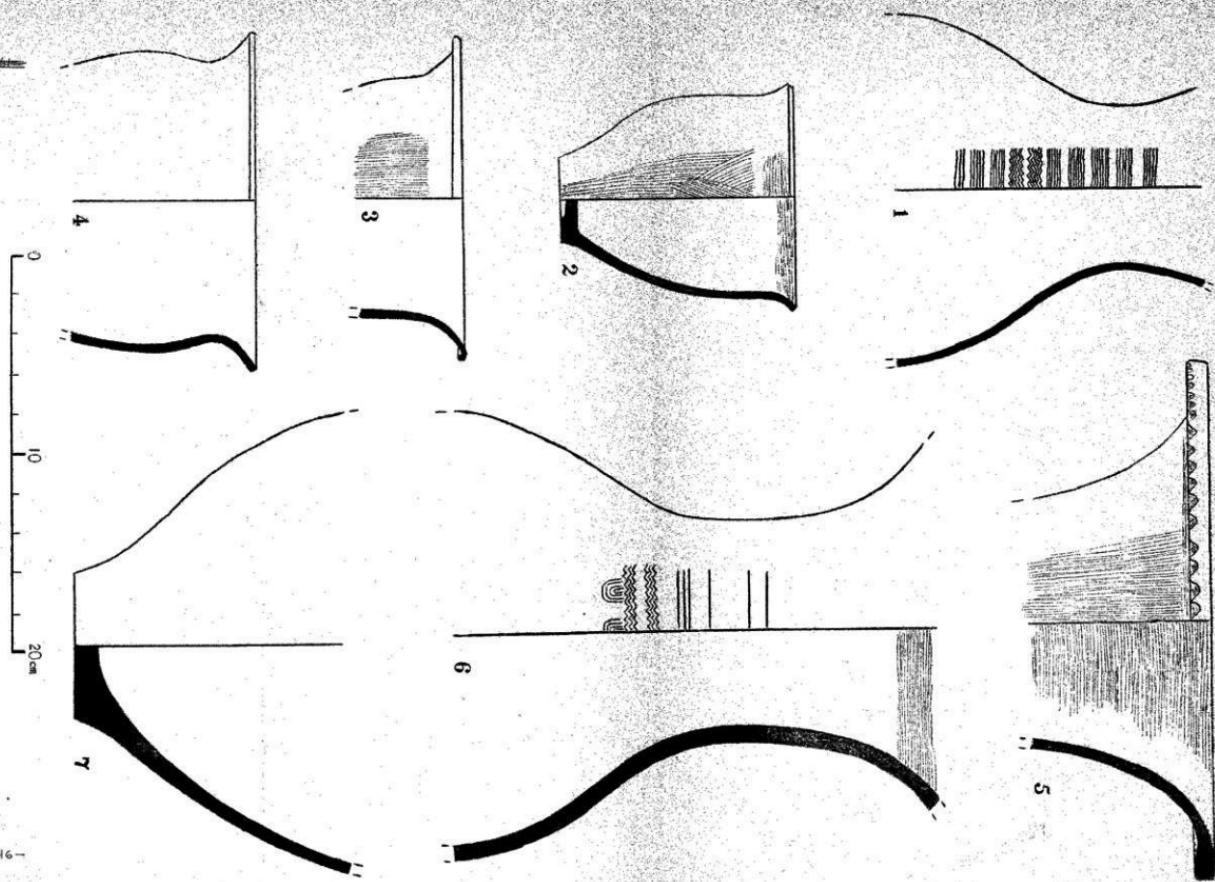
サヌカイトの剥片はこの遺跡にて相当多數発見されていて、石器の製作は恐らくここで行われたことを推定せしめる。その例品を一つだけ図示しておく。これは剥片と言うより原石を打ち欠い

十四圖 石鏃等測量圖

5cm



六図 土器実測図(I)

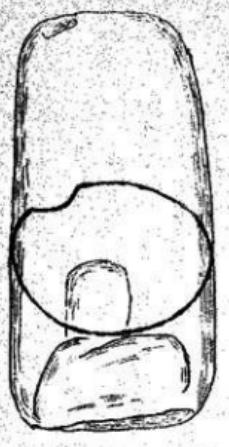


た刃部に近い。多數はもつと小さい剝片である。(オ四圖、6)

右磨丁(オ四圖、1)。約二分の一以下の破片である。石質はよくわからないが、比較的柔らかく、作りも粗であつて、刃部以外はよく磨研されていない。片刃ではあるが、反対面もやゝカーブを示している。

一孔が一部欠失しながらも残存しているが、穿孔は背面から行われ、裏側からの穿孔の方がいちじるしい。八月三日、B3区の擾乱層中より発見された。

石斧。(オ五圖)大型の始刃石斧の破片である。惜しいことに刃部は全く欠失している。一面には刃部の方に大きな欠失(その上部のやゝ小さい欠失は発掘時のもの)、他面には頭部に近く大きな欠失(断面に現われているのはその一部である)がある。石質は輝緑岩である。磨研は可成り入念である。刃部欠失後、



オ五圖 石斧実測図

恐らく漁具として使用されたらしく、刃部の方の欠けあとはによくなっている。八月十日の発掘終了の少し前にD10区の遺物包層の最低部近くで発見された。

土器

発掘に当つて出土した土器は各地区に分けて、また一日毎に、更に必要と思われる場合には層位を分けて、すべて採集した。従つて破片を含むればおびたゞしい数に上る。その一々くわしい検討までには至つていなが、一応すべて目を通し、大体の見当をつけることはできた。それによれば、完形品や大型片が少ないのでなかなかはつきりしないが、今迄行なわれてゐる分類に従えばオ一二様式を主体とするようである。こゝでは器形を或程度推定しうるものを取り出して説明を加えることにする。擾乱層中より発見せられた復原圖については、代表的なものだけ説明する。

調査式土器

小型甕(オ六圖、2)。口縁のごく一部分の欠失はあるがほぼ完形である。胎土は砂粒を相当含んでいて良質とは言えない。全体に灰色がかつた褐色を呈するが、外壁面の約四分の一は黒色を呈し、この黒色は壁内にしみ込み、相当部分にわたつて内壁面にまで及んでいる。外壁面の上部三分の一の部分には漆の附着が相認められ、使用の際、火に当つたことを示している。底部の外面上には中央に浅く広い窪みがある。口縁より下・五乃至二・〇

壁に至るまでの部分は、内外壁面とともに水平に走る細かい条痕があり、これらは仕上げに当つて恐らく指又是「へら」にて器形をとゞえた痕跡であるうと考えられる。これより下の部分は外

壁面においては底縁まで、無造作につけられた痕方向の横目が一面にほどこされている。内壁面は平滑であつて何らの痕跡をも止めてない。土器作りの方法をうかゞわせる痕跡は他には発見できず、「ろくろ」使用の形跡はない。器高一一・七幅、口の径一一・五幅、底の径四・二幅である。この土器は、B9-10区の土器大型片密集部において、他の土器片を取り上げて行つた際に、下の方から横倒しの状態で発見された。

甕口密部片（オ六四、4）。形態には特にいちじるしい特徴はない。胎土は長い砂粒を含む。全体に明るい褐色を呈する。口縁に近い外壁面の一部にいちじるしい媒の附着を残している。模目文は認められない。B9-10の土器片密集部にて発見された。

甕口密部片（オ六四、3）。口縁が外へ折り曲げられている。胎土は長い砂粒を含む。全体にやゝ灰色がかった褐色を呈する。外壁面には媒方向の太い横目がほどこされ、媒の附着もいちじるしい。八月五日、B9区にて発見

甕（？）下半部（オ六四、7）。相当大型の土器の下半部である。土器の形はこれだけではわからぬが、胎土に長い砂粒の混入が著しいところから考えて恐らく甕であろう。全般にやゝ褐色

色がかった灰色を呈するが、壁外面にはやゝ広い面にわたつて銀色を呈する部分がある。媒の附着を認めない。この土器はB9-10の土器大型片密集部にてやゝ傾いて発見された。

細頸甕（オ六四、1）。頸部から胴の上半部に及ぶ大型片であり、口縁部及び胴下部は欠失している。胎土は細砂粒を含んでいるが良質である。全体として褐色を呈するが、壁の外面の半ばは黒色を呈し、この黒色は内部にしみ込んでいるが、壁の内面にまで及んでいない。頸部から胴上部にかけて水平の横目帯が十帯施されている。各々の帯は横目三乃至七条の束よりなるが、その上下端の横目がしばしば消えたりしていて粗略な施文である。上より數えて第一と五帯及び第八と十帯は直線であり、オ六とオ七帯は細かい波状をなすが、この波状文も粗略で不整いであり、直線もところどころゆるく曲つたりして丁寧な施文とは言えない。従つて文様は全般的に陥落・類型化の印象を与える。壁の内面は平滑である。成形方法を推定せしめる痕跡は発見できない。この土器はB9-10の土器大型片密集部において、やはり横倒しの状態で発見された。

大型細頸甕（オ六四、6）。同じく頸部から胴上半部にわたる大型片であり、口縁部及び胴の下部は欠失している。胎土は砂粒を混じてはいるが良質の粘土である。明るい褐色を呈し、黒色の部分は全くない。焼成温度が他の土器よりもやゝ低いらしく、質は

他のものに比してやわらかく、そのために文様も消えかけていて不鮮明である。口縁部に近い内壁面には、整形のための作業によると思われる細かい平行の水平線が認められる。文様は頸部から調上部にかけてほどこされ、上から言つて独立の水平刻線三本（その内、オ一とオ二の線との間隔はせまい）、三線よりなる水平の横目一帯、同じく三線よりなる横目の水平に走る鋭い鑿齒文二番（いずれも中央の線だけがやゝ薄い）であり、更に下方の鋿齒文の下にこれに接して平行の四線からなる半数の小判型文様が適當な間隔を置いて下つてある。文様の施し方は相当に入念であるが、器形・文様ともすこぶる大まかな感じを与える。この土器はB5区の土器大型片断集部において横倒しの状態で発見された。

壺口部（オ六図、5）。大型の壺の口縁部であるが、これだけでは下部の形はわからない。口縁は厚く、その下部は大まかな波状をなしている。全体として明るい褐色を呈し、胎土はやゝ大粒の砂粒を含んでいるが良質である。器壁の外面の口縁から約一厘のところからは、「へら」による荒い搔き取りがあり、その更に下部は粗かい纏方向の横目が施されている。器壁内面はほど水平に走る荒い横目がある。口縁の外側面の一部にわずかながら丹塗りの痕跡が認められる。この土器はB9-10の土器片断集部にて発見された。

高杯（オ七図、2）。口縁部及び脚の一部を欠失しているが、

口縁部の力ずな部分を除いては、ほゞ全形をうかゞうことができる。胎土は細砂粒を含んでおりが良質の粘土である。全般に灰色がかつた薄い褐色を呈するが、脚の一部分のみは黒色を呈し、この黒色は室内にしみ込んでいる。焼きは彌生式土器としてばかり良好で、堅い方である。杯部の下底に近い外壁面の一部には縱方向の「へら」けずりの跡が認められる。恐らく脚をつけた後この形を整えるための作業によるものと考えられる。杯はやゝ傾いていて、全体の形は不整形になつてある。杯部に一孔がある。この孔は内側から指で押し開けた感じのもので、勿論、焼く前に開けられたものである。恐らく縫につけられた把手の外れた跡であろう。この土器は、八月五日に発掘地域の北側の畠地で表面採集を行つた時に得たものである。

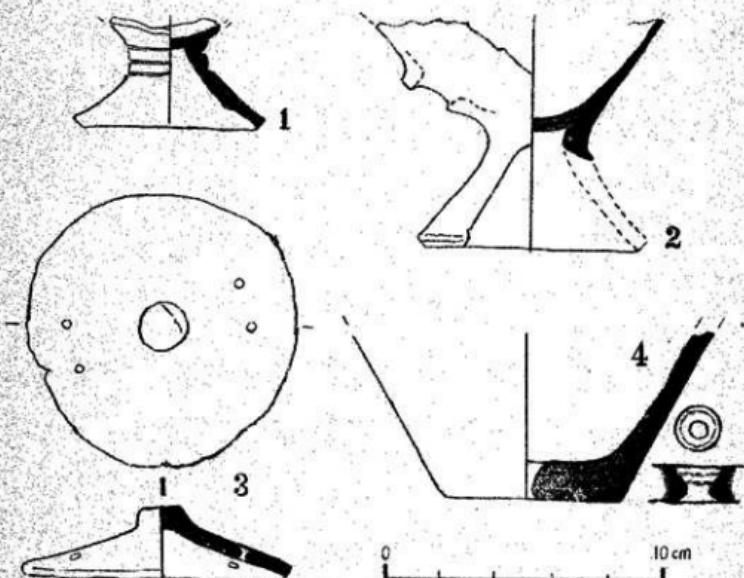
小高杯（オ七図、1）。上部は欠失している。胎土は細砂粒を混じてゐるが良質の粘土である。全般に灰色がかつた薄い褐色を呈するが、脚下部の一部は黒色を呈し、この黒色は盤の中心にまでしみ込んでいる。焼成温度は比較的低かつたらしく、質はやわらかい。脚下部の内壁は「へら」状のものによつて水平にけずり取つた跡がある。杯部と脚部との境目のあたりの外壁面に一条の深い刻線があり、器の周囲をほど三廻りしている（國では平行する三本の刻線のように見えるが、実は一本が三廻りしているのである）。八月三日、B2区にて発見された。すぐ近くに次に述べ

る器蓋が存在していた。

器蓋（オ七四、3）。完形である。

割り合ひ大粒の砂粒を含んでいて、胎土は上質とは言えない。焼きが悪く、非常に多い。全般に明るい褐色を呈するが、裏面の一部のみ黒色で、この黒色は壁の中央までしみ込んでいる。対詫の位置に二個ずつ、計四個の孔がある。全体にやゝ不整形である。八月三日、前述の小高杯の近くで裏向きの状態で発見された。

器底片（オ七四、4）。上部の形は不明である。胎土は細砂粒を混えるが良質の粘土。全般的には灰色がかった薄い褐色を呈するが、一部の壁外面に黒色に近い黒色の広い部分があり、この色は壁の中心までくらいしみ込んでいる。器底の中心よりやゝ偏して一孔がある。焼成後に上下両面から穿孔したものであるが、上面からの方が大きい。器具を回転させて穿孔したこと



オ七四 土器実測図 (II)

は明らかであり、段がついている。この孔は、この土器が醸(酛)物を蒸すための土器で、今の「せいろ」の役割りをするもの)として用いられたのではないかと推定させる。底部の外面には縦の圧痕らしいものが三つ認められる。この土器は八月九日にB9区の純粹な彌生式時代の包含層から発見された。

以上が彌生式土器の代表的なものであるが、後世の擾乱が何時

のものであるか
という点の指標

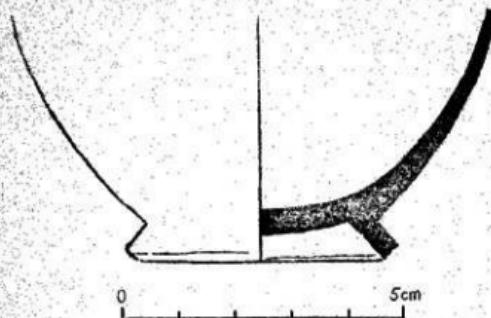
として、須恵器
の代表的な一片

をつけ加えてお

こう(オハ四)。

これは、系底の
ある土器下半部
である。質は須
恵器としてはあ
まり固くない。

うすい風色を呈
するが、壁外表
面は黒色でやゝ
光沢がある。一面



図八 実測器 愚惠須

に「ろくろ」使用の痕跡らしい水平の細縫が認められるが、器形はあまり整正とは言えない。このような土器の研究がまだあまり進んでいないので、厳密な時代考定を試みることが出来ないが、参考としてこゝに紹介し、後考を待ちたい。

以上の彌生式土器の代表的なものによつて分るよう、土器の主要なものはオニ様式であつて、少數のオ四様式が混じっている程度である。こゝから、恐らく本遺跡は部分によつてやゝ時代の異なる土器を出土するのではないかと考えられる。これは今後の調査によつて明らかにしなければならない問題点である。

四、あとがき

これまで述べたように、今回の発掘は、この広い遺跡のごく一部の状態を明らかにするに止つたが、今まで資料の少い彌生式時代の住居址に対して、充分な意味づけは今の段階においては不可能と言ふものの一つの資料を加えることができたし、又、遺物の項の最終のところに述べたように、この遺跡の年代に關する知見を確実にする一步を踏み出すことができた。更に重要なことは、高校生諸君を中心とする新しい態勢による発掘の可能性を実証することになり、郷土の歴史を明らかにする今後の運動に貴重な経験を加ええたと考えられる。こゝに私がその成果をまとめる形にはなつたけれども、この仕事は三島郷史研究会に属する諸先生と生徒諸君、暖い御援助を賜わった高槻市当局の方々、あらゆる面で御協力下さった郷土の方々のものであり、私は單に報告をまとめることを担当させていたゞいたにすぎない。紙数の都合上、非常な數に及ぶこれらの方々のお名前はこゝに挙げさせていたゞかないけれども、この仕事はこれらの方々のものであることを重ねてお断りしておきたい。

彌生式時代という時代は、日本の純粹の原始社会である縄文式時代から、古代國家の成立までの間に介在する變革の時代であつて、その内部における歴史の發展が、後の日本の歴史の歩みを大きく方向づけた極めて重要な時代である。しかも、この時代についての研究はまだまだ不充分で、解明すべき多くの問題を残している。こういつた点からも、この遺跡の重要性を皆様が認識して下さつて、将来の保存、研究に御協力下さることをお願いしてこの報告を終らせていただくこととする。

あ　と　が　き

昭和三十年八月一日から十日間、三島郷土史研究会が高槻市北部の天神山で彌生式住居址の発掘作業を行った時の調査報告が本書であります。その作業、調査状態については詳しく述べてある通りで御座いますがこの事業の、企画、現地指導、調査等総ての問題を統轄していただいたのが、東淀川高校教諭、藤沢長治氏でありましたので、事后、高槻市教育委員会は藤沢氏にその調査報告書の作成をお願いいたした次第であります。高槻市は之より前、数年前から市史編纂の意図を持ち、市教育委員会に市史編纂委員会を設置し、之が調査、編纂に当つたのであります。高槻市史の著明な、一大時期と考えられているのは、古代の彌生式文化の時期と近世初期のキリスト教時期とであります。後者は暫く置いて、前者について考えて見ますのに、既に昭和三年、京都大學農学部振洋農場の内に「彌生式文化、安閑遺跡」を持つております。今度の「天神山彌生式遺跡の発掘」はこれに連るもので、当市といたしましても極めて重要な意味をもつもので御座います。依つて、市教育委員会は市史編纂委員会を通じ、三島郷土史研究会のこの事業に協力し、且之が事後処理として、当報告を発刊いたすことによつたいたした次第で御座います。この作業に炎暑の下、連日の努力をいたしました吹田、深木、春日丘、島上、浪工の各高等学校生徒諸君及三島郷土史研究会諸賢の御労苦、別して、之が御指導と専かるる精密な調査報告書を執筆されました藤沢長治氏に深大なる謝意を捧げる次第で御座います。

最後にいつもながら、かゝる事業に燃えず御指導をいたさうしている当市教育委員各位、事務局各位、及び御援助をいたさうする市当局に更めて御礼申上げます。

尚今後共、市史編纂事業に対する温い御協力を市民各位に希う次第で御座います。

昭和三十一年五月の一日

高槻市史編纂委員会にて

天　　野　　高　　信

郷土高槻叢書

高槻市史編纂委員会

(完版)

昭和二十六年四月十日刊

昭和二十六年七月十日刊

昭和二十七年九月十日刊

昭和二十八年六月十日刊

昭和二十八年十月十五日刊

昭和三十年九月三十日刊

昭和二十九年三月三十日刊

昭和三十一年七月十日刊

昭和三十一年九月三十日刊

昭和三十二年三月三十日刊

昭和三十二年九月三十日刊

昭和三十三年三月三十日刊

昭和三十三年九月三十日刊

昭和三十四年三月三十日刊

昭和三十五年三月三十日刊

昭和三十六年三月三十日刊

昭和三十七年三月三十日刊

才一集	郷 土 高 槻 叢 書	天 高 槻 市 文 化 研 究 會 修 編	昭和二十六年四月十日刊
才二集	片 山 家 所 藏 文 書 目 錄	阪 大 教 授 藤 永 井 家 文 書 直 幹 監 修	昭和二十六年七月十日刊
才三集	高 槻 藩 永 井 家 文 書 直 幹 監 修	阪 大 教 授 藤 永 井 家 文 書 直 幹 監 修	昭和二十七年九月十日刊
才四集	高 槻 藩 永 井 家 文 書 直 幹 監 修	阪 大 教 授 藤 永 井 家 文 書 直 幹 監 修	昭和二十八年六月十日刊
才五集	高 槻 天 坊 通 幸 彦 著 上	森 田 家 所 藏 文 書 直 幹 監 修	昭和二十八年十月十五日刊
才六集	高 槻 森 田 家 所 藏 文 書 直 幹 監 修	阪 大 教 授 藤 永 井 家 文 書 直 幹 監 修	昭和二十九年三月三十日刊
才七集	高 槻 森 田 家 所 藏 文 書 直 幹 監 修	阪 大 教 授 藤 永 井 家 文 書 直 幹 監 修	昭和三十一年九月三十日刊
才八集	高 槻 天 神 山 彌 生 式 時 代 道 路 發 掘 報告	阪 大 國 史 研 究 室 中 部 よ し 子	昭和三十二年三月三十日刊
才九集	高 槻 森 田 家 所 藏 文 書 直 幹 監 修	阪 大 教 授 藤 永 井 家 文 書 直 幹 監 修	昭和三十三年三月三十日刊
才十集	高 槻 森 田 家 所 藏 文 書 直 幹 監 修	阪 大 教 授 藤 永 井 家 文 書 直 幹 監 修	昭和三十四年三月三十日刊

郷土高槻叢書第8集

高槻市天神山彌生式時代遺跡発掘報告

発行 高槻市教育委員会
編輯所 高槻市史編纂委員会
右代表 天野高信

大阪市東区豊後町五二番地

株式会社

電話 東(94) 双葉工房
七五四三番